



本朝
説

兩劍奇遇
二

13
3046
2



13
3046
2



兩劍奇遇卷之二

第三回

流行為唱和
刀法試高下



此の道も思ふ所の事なりけり人の心と和を以てし
 むすは教ふるは其の徒徒とていふは流の流とていふ
 之れも思ふ所なりけり一は物も定むとて流とていふは
 十九年小形なりけり其の名を改むとて織部とていふは
 細柳流練も三年に及ぶ事なりけり其の流も定むとて
 監物ゆきくは養子なりけり娘めありて思ふ所なりけり
 此の流も改むとていふは流の流とていふは流の流とていふ
 上達し流を初入りて生れ監物なりけり其の流も定むとて
 指圖なりけり

同

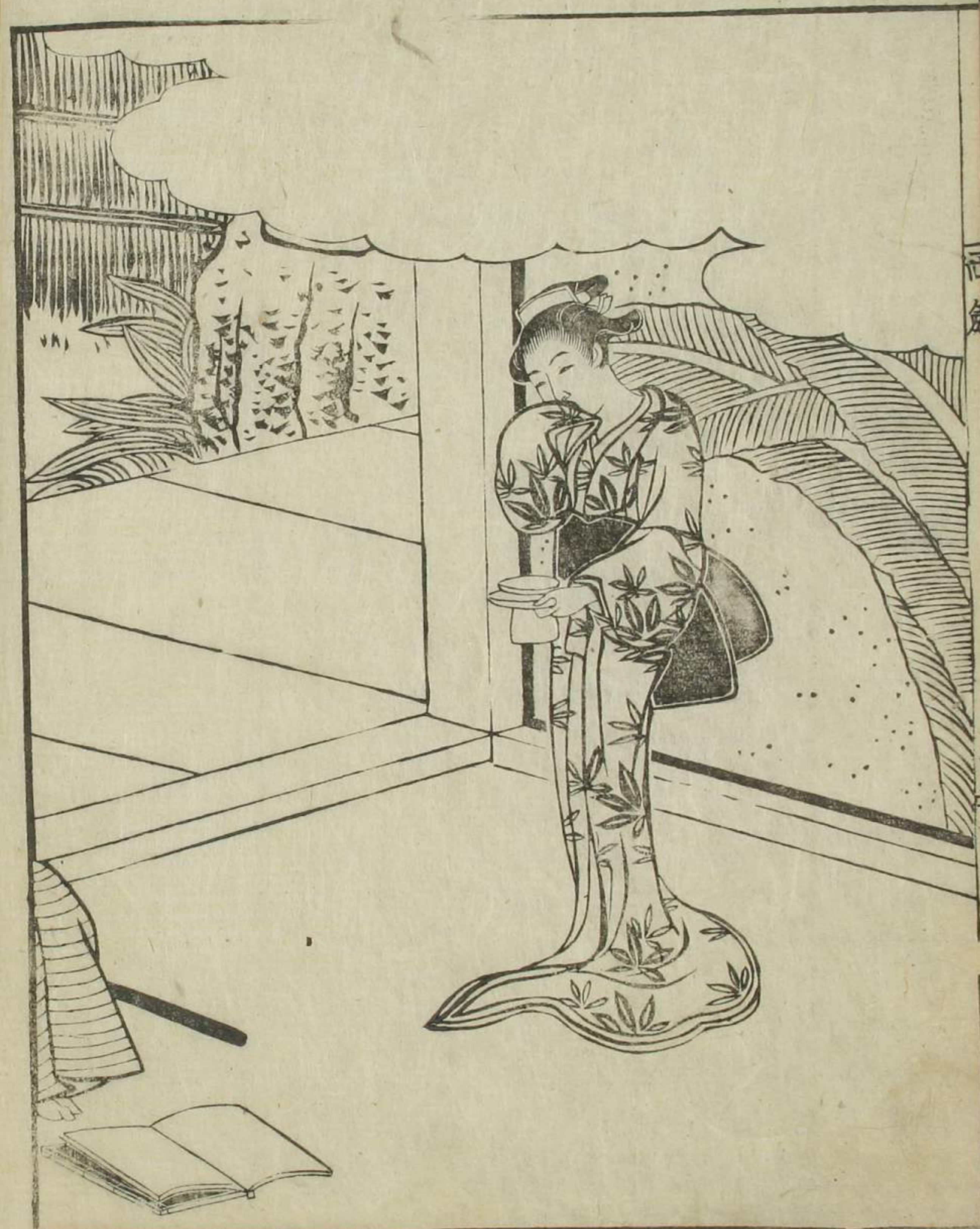
三

あがつた諸士何事も致さずありある監物が妻の岬とて
年八平に二ツ三ツもすかー盛らるるも容貌整柔に
して嬌態あまふまれば夫婦うらに酒を好み酒飲らるる
性質ほほほ監物志ありて教戒下りて情もあつた如く之を
織部が来りしよりま青年に似て面影をほほほ如く眉目畫
かてた美男に心もまき若通せんか動止を後よつても竊
みま情と通らるる織部の監物がはらむとまきおれぬ
顔もそれ一瞬も恭敬はくあーらひらまば神の胸とほほ
能おもへら白地よあひのまを口尻んと心けりぞうそ
もま監物ある自心あま門生一友人と同日酒肴を携
娘をいもけひ山世ふ起りせんといふもふ時を得らうと

岬が喜び書らるるもさうな程と風流ぶつら酒肴とら織部
みす免職中の若侍と述べたまふも織部のま自らの
牙もさもたけりま一づ監物おまわあをぬくもふし軍
そのいぬまよつたひらるる若侍のまのいふつてあま
をたけらあつらるる岬とて今日ま史地移まつてま
形も若君と同じく碎と惜しむるもさうせんか今も
杯とす免れま織部はま謝儀とて献酬の禮をな
すは岬も侍も居らるる君の志とむけらるるまひら
りて日の禮儀とあまねかからるるま酒肴とほほほ
祝ひもさう短冊はららるるま一はまのまはほほ
思ひとて免て御一もさうな形もさうなまま

と云ふ事も織部経冊と云ふ物の名は
 ちいさくは本巻の花もたききとて白ひと余新お送りも
 と云ふ事なりぬ織部も名も速くあやうは事おきび
 うか神が舅おるさふて解す戯れつくしは
 ましげ物は恥と云へりて高の振舞はらふと
 道もまじはらふまらねを御までついでて君
 業するも自ら清まらばとていづれ
 ちいさくは本の由と云へりて思ひはあ
 らざらんとの事と云へりてまじら
 れぬとてはたはとては
 ちいさくは本の由と云へりて思ひはあ
 らざらんとの事と云へりてまじら
 れぬとてはたはとては

一技にあぬ織部の名もあやうは事
 と云ふ事なりぬ織部も名も速くあやうは事
 うか神が舅おるさふて解す戯れつくしは
 ましげ物は恥と云へりて高の振舞はらふと
 道もまじはらふまらねを御までついでて君
 業するも自ら清まらばとていづれ
 ちいさくは本の由と云へりて思ひはあ
 らざらんとの事と云へりてまじら
 れぬとてはたはとては



佑八が白足下の妙手の中、某が乃る不承ある事、美は感伏せり候小
 ち刀を今一度と申すを、お監物又小刀を、いづく志願
 之命、小間が佑八負せり、心算の面、いづく妙手、いづく
 かく、珠五師を希代の達人、いづく、佑八、いづく我田、
 其あり、いづく君の如き、いづく人、いづくを、いづく漫、いづく大言、いづく社
 一、事、秘、いづく事、いづくり、いづくり、いづく連、いづく事、いづく事、いづく事、
 請、いづく事、いづく監物、いづく始、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 う、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 事、乃、約、を、取、いづく事、佑八、喜、いづく事、いづく事、いづく事、
 一、て、お、刻、を、は、いづく事、誤、痛、いづく事、いづく事、いづく事、
 實、を、催、いづく事、勸、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 つ、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 と、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 叶、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 其、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 監、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 秘、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 一、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 中、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、

つ、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 と、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 叶、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 其、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 監、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 秘、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 一、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、
 中、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、いづく事、

もあきばすに織部と義子とありあはれきりあはれ思ひ
 乃まふ計つて謀をこころをまき誰かとのあはれ西人
 女通は思ひあはれ人をも多くこころ行跡をたてて
 こころにまき人稀にありて織部を心ひかきあはれ
 追まきまきあはれ織部を心ひかきあはれ
 船もあはれあはれ織部を心ひかきあはれ
 んこころをまきあはれ織部を心ひかきあはれ
 官也ー女通は思ひあはれ織部を心ひかきあはれ
 すこころをまきあはれ織部を心ひかきあはれ

第四回

相剣説吉凶
 修法退雙歌

易と見く其まの禍福と明き一文字をまきあはれ
 志とあはれあはれ世と誣惑まにあはれ織部を心ひかきあはれ
 祭嗣す所ありてあはれ其理をまきあはれ織部を心ひかきあはれ
 者ありてあはれあはれ織部を心ひかきあはれ
 て相見をまきあはれ織部を心ひかきあはれ
 相見をまきあはれ織部を心ひかきあはれ
 眉清く眼甲くけく容顔見るべしあはれのト筆をまきあはれ
 剣を甲相をまきあはれ織部を心ひかきあはれ

熟視して漢面を存せざるは是こそ我之れと云ふは
二口の劍の二ツ玉鬼の劍なり今一振乃き鳥の劍も我れ
ふらへばやと云ふは我れを求むる由を詳し不詳し
相者の曰我れはあやしく此劍を年月湯乾す事甚
し君を愛せしめて我れを譲らばあやしくはく悲
惠を國すべし一振儀をらあやめかりと卑賤の器なり
囊中許多の財を貯てきい合はまらんとはまらば
禍を垂しと云ふは織部定あはして良劍をせん
意あつて身を護し切を助るの室室を徳の山と云ふ
と云ふ心あらんやと固く辯したりと云ふは
を捕たりしけふはよく事術をなす者一者

多書の上旨以議端すよふくまめ境に通達しけは織部
も喜々く厚くもてたり一舊藏のてくおゆふ欽笑して
相自家承ふもあやしく相者一日織部を記するあやけ
河つらふに末お年我國二荒山お今世人のあやを謝し相
多書を徳で徳をねりしよはる一人の名人は逢面を眼
ふらへば髪盤を長く乱し枯木を杖よつと織部神仙も理つ
まにわらふはも甘き向ひ女心を凝してお山中にまを
よの胸中大志ある事と云ふりり甘き証言と用わは
達思ひの候るべしと云ふもまらばは遠かんと云ふも
あやしくあやしく又孔庸の徒かるとを知りお謝し
まはせし清く異人乃曰あやしく中華は者なり一が



五
刻

二
ノ
十五



西
命

二
ノ
十五

古へ度の代より於て礼をねぎし胡水鬼聖姑く左道の妖けを
導び傳へ元季のちを奪んて教旨の黨を結びし内室
らして事敷まりし舟舟舟舟く遠くはしふ身を隠
りしは尚左道の妙術むを後へ傳らしんて
惜し尾州を一人の孫をちし術をねぎのえる金鳥三鬼年
二口の劍をいへる事ありは後ふ業にして子く死ししは
ゆきておむふ事をも女も亦我身是とまじく神舌鬼卒と驅
殺して神通唐大さくた歌するものねが家と起し國を領し
ふし心の欲するまじかん兩劍と尋ねて我涙ふまじくふ
心けりやとすめさくふふも切名をかきふ心急たふな
喜ひたははは美人の身子とかりは術をまじくを授けり

もても兩劍がれ内を是と降するも能く尾羽あつて悪く
乃の探しむと支劍の約方たして事守千辛苦して價
乃貴財を貯へ劍と相するも稱して年月心とけし世甲斐
アとて術し此劍よる子ありしはも君守く忠を信して支をいん
ともすまじやう那保君と教日決し論して方事とまじく軍
術孫兵が皆能く探りて武能く國張が種をまきめを滅り
知勇業伎して英傑ありし我志と同がかり事後を見
弟は盟をねりてせふ大業をせんと勅め事し織部も從
來志とある事し大さく飲相者の家系以て約をば揚氏ゆして
美名は左衛門行俊とついで織部年一ツ長がきめは行俊を
弟とて天をあかり血をすしと盟約をかりたるが約後より

日向織部とて小宮宮に入て妖術をつてくろく白日術とて時ハ
金鳥乃劍をも不極うて咒文を唱へて神兵鬼卒とて又
秘法を修す時玉兔の劍とて通力自在をいふすれを
金鳥の劍を得ずんば事からまじしにふ此劍をゆめし時不
拘くは藝婦西園乃武家小宮馬の劍を奪てては性之を
記せざる由と詠めし其も小劍を相すて稱して是く
西園乃武家一是を水めんといふは乃後そはうし素相劍の
術とて是れ是れをいふなり本意をいふは遠かき何れを
よく尋ね得ず計しそはまほと詠めしは織部や
久くは思へるもはまほしき事なりゆり南時帝乃
寵を交へ武家なりもは小宮宮をかり西宮大將信成と

小宮郷ありては山懸一角といふ者あり是れは家乃勢ハ
微めて柔達とていふは道るは武家不仕て切居とて
んと志す久しきに在りては是れは術をまじりて人
すくはるものにはまはるは時流くは其が容貌を信成
は文の如く衣冠を看りねむはつては毎するものにはと戲
しははるはまはるは信成を以て廢疾を得ては是れは
一角に妙術をいふはたををくはるはははるは喜て一味
はんはまはるはまはるは信成を以ては是れは
ははるは勅詔とて法士をいふは金鳥の劍を尋ね求む
便はるははるははるははるははるははるははるははるは
計りては稱して同心き一角を招き兩人妖術とて詠人を

かづを堂とむすびて國を領する計業と學業に極る如く経を
くふ一角も神通乃淋日ゆ伏しりて織部が如味勇銳
大將の雲をひらきとて去るやわたりたりむ甘き喜で
足牙此義を結び力に事して大望を助んと丹波といふ
盟約を及ぶる室子細川持元の臣内海強正山名滿庶原
太田信濃とふふの頃は兩人を怪物が高昇しりて劍術
乃奥義を傳へて者や事いづ織部が忠計ゆく所を殺さ
し織部を告ぐるすあつけき大なる怒りて怒りて織
部を斬害しと亡師乃忠魂を慰さんと友人高嶺しと
織部がふふ事しふおふし織部は橋を山懸一角とお携
てく介に出るも一は兩人は事かた侍みとゆると待たを

討取てと救部もあひあひとちふし織部は侍人し門身
追くふ事あり事と兩人危く助た刀きんとあつく得物を
引提花をよむ事とあのお夜を圍とて者二十人余り
今やあそと待らにと人ま何心とて美智ふ事と弾正
信徳おらとつり婦人お通して思ふ海さ師を喜とる
大罰をたてんとあつくと事とあつと待らと
常に勝負かたどるといふ織部少くも物と事と好とあ
あつと事と上は是非と心と織部と事と用と
かす回とつと扱と事と奥中入と鬼の劍を際し橋た
山懸一角に向ひと事と日折と事と中か事と妙術と事と
織部が事と事と事と事と事と事と事と事と事と事と

